合間　- まちの間に滞在する -

眞佐喜楓花　伊藤研究室

敷地：京都市伏見区深草
用途：中長期滞在施設
模型：模型 1/50　敷地模型 1/1000

01 背景

1-1 観光地化の進行

稲荷山の麓に広がるまち。琵琶湖疏水と京阪電車・JRの線路が南北に貫く。伏見稲荷大社のすぐ近くには生活圏が広がっている。

20 年前 ● 住宅街が広がる

15 年前 ●

まばらな観光客。
地域住民のシンボル的な場所。

10 年前 ● 千本鳥居にスポットが当たり
外国人観光客が増加。

近年 ●

2023 冬
コロナ禍を経て観光客が回復。
夜でも多くの観光客で賑わっている。

このようにここ 20 年で環境が激変したまちである。

1-2 観光客の受け皿

大幅に増加した観光客の受け皿として高齢化などによって増え続ける空き家や狭い路地によって再建が難しい空き家を宿泊施設として利活用する事例が増加。

▼

このような流れが進行すると観光地化が地域住民の生活を侵食していき一時利用のまちと化す。
生活圏維持のため観光地化ではないまちの行く先を考えたい。

▼

空き家を新規住民の住宅として活用するため、まちに興味を持った人たちがまずはまちのスケールに身を置くことのできる中長期滞在施設を提案。人通りの多いゾーンと地域住民の生活圏の間を敷地とした。

1-3 中長期滞在施設

半年〜1 年単位で滞在できる施設を提案。まちの方向転換の契機として、一過性ではない滞在者の居場所を設ける。ここを一つの拠点とし新規参入者を受け入れるサイクルを作る。そして局所化の分散をはかる。学生などは住み込みで働けるようにし、家賃を安く設定する。

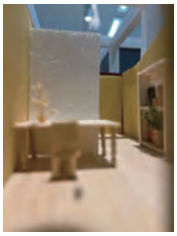
東側

滞在者の部屋

シェアキッチン

本屋

西側



滞在者の部屋

滞在者の部屋は一人部屋が計 10 部屋、二人部屋が 1 部屋ある。一部屋を約 8 畳とし、部屋で生活が完結しないように洗面所やキッチンは共用となっている。
東側には地域に開いたシェアキッチンを配置し、会話が生まれる場として機能し、滞在者同士や滞在者と地域住民の交流を生む。

宿泊施設やマンスリーマンションとの違い
・宿泊施設のような一時利用ではなくまちのスケールに身を置くことが基本
・自分の持ち物をある程度持って来ることができる
・地域との交流がある
・定住ではないことから不十分さが残るためまちとの関わり合い方が単調ではない

02 地域特性

2-1 伏見稲荷大社の鳥居

奥性 ▶ 奥に向かう体験

周期性 ▶ 滞在者のサイクルを作る

融和性 ▶ 地域住民の生活を学び賢い生活者となることで地域に取り込まれ馴染んでいく過程を助ける

03 建具

3-1 建具リサーチ

▶

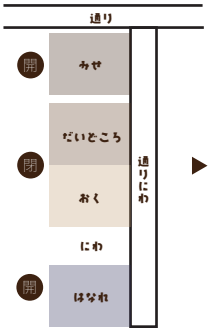
・外部（自分以外）との境界の調整ができる
・居場所を作りやすい
・動くもの・変わるものに対して対応しやすい
・空間のメリハリがつけられる

西側平面図 1:500

04 設計手法

4-1 町家

伏見稲荷には間口が狭く奥に深い町家形式の住宅が残る。京町家は基本みせ・だいどころ・おく・にわ・はなれで構成され、通りにわを介して繋がっている。前面の通りに対して開いた場所と閉じた場所が一つの軸に混在し、メリハリのある空間が構成されている。



狭小敷地ではないところで展開することでまちとの関係から成立した町家の特性を浮かび上がらせたい。
町家の形式をヒントに設計を行った。

◀ 通りに対して垂直に構成

廃園となり取り残されたままの幼稚園のコンクリートの躯体を利用する。コンクリートに覆われるように通りに対して垂直に町家を配置。町家特有の奥に向かう行為が生きる。

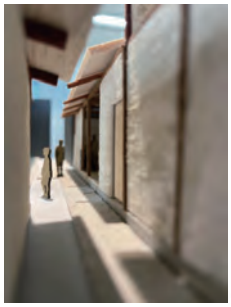
▼ 通りに対して平行に構成

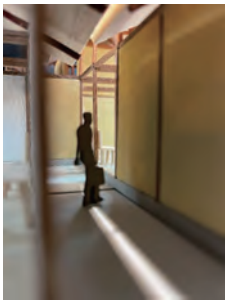
通りに対して奥にあったものをさらす。
建具を開け放ったときに町家の様子が断面として現れる。町家のメリハリのある空間構成を建具によって取り入れる。
町家の軸が入り混じり、多様な方向性を持つ。

東側 1 階平面図 1:500

4-2 狭長なもの

狭くて長いものの先は完全には把握できないが様子を感じ取ることができる。
自分の空間と外部の境界を好きなように設定できる。





断面図

3-2 建具の利用

建具を開け放つことで通りが拡張
まちと一体となる

▶

ここでは建具の開閉・可動によって

通す

区切る

居場所をつくる

遮る